

二月二日午後 問題用紙

国語

座 席 番 号			
			番

受 験 番 号			
			番
			氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で十三ページあります。
 - (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
 - (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
 - (四) 受験番号と座席番号は算用数字で記入してください。
 - (五) 試験時間は五十分です。
 - (六) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

(1)

日本語の名づけの森は、奥が深い。キラキラ輝いている今風の名前たちは、気づいてみれば、その森へのほんの入り口。キラキラネームの迷い道はさらに奥へと続いていて、行く手には営々と育まれてきた日本語の太古の言葉の森が広がっていた。

漢字の読みというのは、そもそも一筋縄ではいかないもの。それは日本語という言語が内包している宿命なのだ。

はるか昔、古代日本には自前の文字がなかった。①私たちの祖先は、異なる体系を持つよその国(中国)の言語である漢字を借りて、それをどうにか手なづけ、日本語を形成していった。形式ばった言い方をする、日本語の歴史は、漢字とやまとことばの*1相剋と融合の歴史でもあったのだ。そして今もなお、日本語は新陳代謝を繰り返して、時代の潮流の中で*2攪拌され、日々変容している。

そういう構図の中で名前というものを捉え直してみると、a 名づけは、「声に出す言葉の響き」と「漢字という文字」がせめぎ合う、ホッとした最前線ということが出来る。ことにキラキラネームの存在は、日本語の読みと文字にかかわる宿命を凶らずも浮き彫りにする結果になっているといえる。

キラキラネームに代表される、漢字を意味のイメージに合う訓で読んでしまう当て字感覚、名前の音の響きにこだわる心理——②こうした言語感覚は、日本語を使っている私たちすべてにかかわってくるテーマである。やはり、バッシングしているだけでは、現象の本質にはふれることができないのだ。

(2)

キラキラネームでなくても、初見ではどう読んだらいいのかわからない名前が多いものだ。前章では歴史上の人物を取り上げたが、最近のタレントや俳優の名前(芸名とは限らない)でも、戸惑うことがしばしばある。

b 「大森南朋(おおもり・なお)」「小澤征悦(おさわ・ゆきよし)」「市川実日子(いちかわ・みかこ)……。「内野聖陽(うちの・まさあき)」もその一人だったが、彼はあまりに読み間違えられるため、音読みの「せいよう」に改名したとか。

それから私は、「剛力彩芽(ごうりき・あやめ)」というインパクトのある名前も読めなかった。字面が似ている「沢村一樹(さわむら・いつき)」と「北村一輝(きたむら・かずき)」も、いつもこんがらがってしまう。

③地名となると、さらに難しい。その土地の人でないと到底読めないような難読地名が全国いたる所にごろごろしている。

あらかじめ知っているから当たり前のように読んでいるが、「大秦（うずまさ）」とか「指宿（いぶすき）」「鳴門（なると）」だって、漢字と読みが大きくズレている。東京都内の「御徒町（おかちまち）」「日暮里（にっぽり）」「馬喰町（ばくろちよう）」「等々力（とどろき）」などという有名な地名にしても、まっさらな目で見てみたら、案外読めないのではないだろうか。

地名の場合、自然発生的に生まれた呼び名がほとんど。それぞれの土地の歴史や文化に深く根づいて呼ばれていた「音」が地名の本体であり、「表記」（漢字）は当て字だったり、途中でほかの字に転じたりもしているため、漢字が通常の読み方以上によけい読みにくくなっているのだ。

もつとも、それは地名に限った話ではない。太古、いつの頃からかコミュニケーションの手段として言葉が生まれ、話し言葉だけの「声の文化」の時代が長らく続いた。そこに文字が持ち込まれて、声に出すだけだった言葉が文字で記録されるようになった。そもそも日本語というのが、古くから存在していた「声の文化」に「文字の文化」が重ね合わさってきたものなのである。

c、もともとの「声の文化」において、名前とはどのように捉えられていたのだろうか。本章では、「声に出す名前の音」という観点から、私たち日本人にとっての名前というものについて考えてみたい。

(3)

ということ、いきなりだが、ここで古代にワープしてみよう。

まずは、遠い遠い過去の日本を想像してみよう。そこには文字は存在せず、コミュニケーションはもっぱら話し言葉に頼っていた――。

文字があるのは当たり前の私たち現代人には、そうした無文字社会はイメージしにくい、ちよつと目を転じて世界を見渡せば、文字のない社会はけっこうある。また文字は存在していても、それを知らないで生きている人々も大勢いる。無文字社会などというと、仰々しく感じられるが、話し言葉だけでも社会生活はさほどの不便もなく成立していたに違いない。

④ 古代日本における無文字社会について、『古語拾遺』の序文に次のように記されている。古代史といえ、『古事記』（七十二年成立）と『日本書紀』（七二〇年成立）が二大文献だが、『古語拾遺』も、八〇七（大同二年）に齋部広成という官人が平城天皇に献上したといわれている貴重な史料の一つである。

「上古の世に、未だ文字有らざるときに、貴賤老少、口口に相伝へ、前言往行、存して忘れず」ときけり。

――聞くとところによると、「上古の世にまだ文字がなかったときには、身分の高い者も低い者も、老いも若きも、互いに口から口へと伝え合つて、昔の人が言い残した言葉や行ったことをよく覚えていた」という。

遠い昔は、文字がなかったが、社会は*3つがなく営まれていたし、d 文字に頼りきっていない分、前言往行をしつかりと記憶に留めてい

たと思われる。

そんな社会では、言葉の力は重く受け止められ、口から発する言葉（音）そのものに靈的なパワーが宿っていると信じられていた。言葉の魂、つまり言靈ことだまが日本中に満ち満ちていた。そのさまを『万葉集』は、「言靈の幸はふ国」（言靈の力により豊かに栄える国）と*⁴言祝ことほいで、高らかにこゝろ詠うたっている。

神代より 言いひ伝つて来くらく そらみつ 大和やまとの国は 皇神すめかみの 厳いづしき国 言靈の 幸はふ国と 語り継つぎ 言いひ継つがひけり……

（山上憶良 卷五・八九四）

——神代より言い伝えられてくることには、空に充ちる大和の国は、神威に満ちた国、言靈の靈力のある国と語り継ぎ、言い継いできた……。 「言靈の幸はふ国」では、「コト」は「言」であり、「事」である。言うコトと、出来事のコトは同じなのだ。だから言葉の靈力がたいそう強く、声に出して口にすると、それが事となって、言葉で言ったとおりの状態になると考えられていた。

(4)

言葉に宿っている神秘的な靈力によって、良い言葉は吉事を招き、悪い言葉は凶事を招く——こんなふうによく書くと、古代人の迷信と受け止める人もいることだろう。

e 考えてみると、現代の日本においても、その場にふさわしくないとされる忌み言葉が数多くあり、冠婚葬祭の場では、おめでたいことに影を落とすような表現や、^⑤不吉な表現を使わないよう心がけるのがマナーとされている。

結婚式には、別れを連想させる「別れる」とか、「終わる」「切れる」「失う」「割れる」といった言葉は「法度」。「終わる」は「お開き」（漢字で書く際は、縁起のいい「御披露喜」を当てる）、「ケーキを切る」は「ケーキにナイフを入れる」と言い換えるのが習わしとなっている。お正月の鏡餅も、やはり「切る」のではなく、「鏡開き」と言う。

また受験生がいる家庭では、「滑る」「落ちる」「転ぶ」は禁句だし、「死」を連想させる「四」や「苦」を連想させる「九」はさまざまな場面で敬遠される。さらに居酒屋では酔っ払いながらも、気づけば「スルメ」のことを「アタリメ」と呼んでいたりする。

どれもこれも、みんな、よくないことが現実化するのを恐れていることである。もちろん、そんなことを信じているわけではない。そんなわけがないのは頭ではわかっている。だけれども、心のどこかでほんの少し不吉な影におびえ、知らず知らずのうちに縁起の悪いことはなるべく言わないようにセーブする心理が働いてしまうのだ。

言葉へのなみなみならぬこだわりは、古代人のみならず、私たちの中にも色濃い。どうやら私たちにも言霊を気にするDNAが受け継がれ、自分で想像する以上に“言霊信仰”が心の奥底に息づいているようだ。キラキラネームが音の響きを優先してつけられているのも、あるいはそんな言霊へのこだわりのなせる業なのかもしれない。

(5)

古代日本において言葉の霊力が強く信じられてきたのは、話し言葉のみによる時代が長かったことだけが原因ではない。民俗学の世界では、そもそも国の成り立ちにあたって、言霊が深く関与したとされている。

日本は初めから「言霊の幸はふ国」だったわけではなく、天孫降臨が果たされる前には、まがまがしい不穏な世界が広がっていた。それが言葉の力で国譲りを成し遂げ、晴れて「言霊の幸はふ国」になれた、と神話は伝える。

国譲り以前のこの国の姿はどのようなものだったのか、『日本書紀』にはこうある。

彼の地は、多に螢火の光く神、及び蠅声す邪しき神有り。復草木咸に能く言語有り。

(巻第二 神代下)

——この国には、螢火のように輝いている悪い神、五月の蠅のように湧き立つ煩わしい邪神が大勢いた。そのうえ、草にも木にもそれぞれに精霊が宿っていて、ものを言って人間を脅かした。

『古事記』でも、次のように記されている。

ここをもちて悪しき神の音は、さ蠅如す皆満ち、萬の物の妖悉に発りき。

(上つ巻)

——悪い神の声は、あたかも五月の蠅のように世界に満ちあふれ、すべてのものに神意として深く隠されていた*5呪詛が、その徴として、ことごとく立ち現れてきた。

印象的な「さばへ」という言葉は、陰暦の五月頃に発生する蠅のことで、そこから転じて、蠅が群がって飛び交っているような煩わしさや厭わしさを表す。

黒々とした蠅の大群と、唸るような羽音……。想像するだに、不気味でおぞましい雰囲気伝わってくる。現代ではこれを「五月蠅」と表記。そのイメージがより明確に表現されている。が、それにしても、そうとうな無理読みである。さらに「五月蠅い」と送り仮名をつけたら、その読みは

* となる。これもまた強引だ。

つい無理な文字遣いに気を取られてしまったが、それはさておき、ともかく*6 記紀によると、神代の昔、まだ葦原中国（日本の国土のこと）が平定される以前には、そんな厭わしい蠅のような疫神があちこちで声を上げ、さらに動物も、草も木も、ありとあらゆるものの精霊たちが、ああだこうだと呪詛を言い立てていた、というのである。

そうした地上の荒ぶる神々や精霊たちに対して、高天原の天津神は、なだめたり、誉めたり、説得したり、脅したり、諭したり、つまりはそう、言葉の力で鎮めていった。

…：荒振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて 語問ひし 磐根 樹根立 草の片葉をも語止めて……

（大 祓詞 神社本庁蔵版）

天津神の言葉によって、悪しき神々や磐根（岩石）、樹根立（木立）、草の葉までもがみな、ガヤガヤと騒がしく話すことを止めた——古くから神道で神事の際に唱えられてきた祝詞の一つ「大祓詞」は、そう伝えている。

こうしてのち、静かになった葦原中国はやつと「言霊の幸はふ国」となり、天孫降臨を果たして天孫が統治する国となった、と神話はいう。概して「言霊の幸はふ国」などという、単なる*7レトリックのように聞こえるが、じつはそこには、言葉を駆使して繰り広げられてきた壮大なバトルが隠されていた。むろん神話がそのまま事実ではないのは言うまでもないが、^⑥少なくとも古代の人々にとっては、「言霊」はけっして言葉の上だけの修辞ではなかった。言葉にしてはつきりと言ったことは、本当に現実となるものだったのだ。

（伊東ひとみ 『キラキラネームの大研究』 新潮新書より）

注 *1 相剋……相対立する二つのものが、たがいに相手を倒そうとして激しく争うこと。

*2 攪拌……よく混ぜるように、じゅうぶんにかき回すこと。

*3 つつがない……無事であること。

*4 言祝い……ことばで祝うこと。また、そのことば。

*5 呪詛……災いがふりかかるように悪意をこめて祈ること。

*6 記紀……奈良時代の歴史書『古事記』と『日本書紀』を合わせた言い方。

*7 レトリック……ことばや文章の表現効果をかためるための技術。修辞ともいう。

問一 空欄 a く e には次のアくカの各語が入ります。最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア. たとえば イ. そして ウ. しかし エ. 要するに オ. むしろ カ. では

問二 ——— 部① 「私たちの祖先は、異なる体系を持つよその国（中国）の言語である漢字を借りて、それをどうにか手なづけ、日本語を形成していった。」とありますが、現在の日本語はどのようにでき上がったと考えられますか。次のアくエの中からも適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア. 古くから完成していた「声の文化」に中国の言語である漢字を参考に日本独自の「文字の文化」を付け加えてできた。

イ. 古くから存在していた「声の文化」に中国から取り入れた「文字の文化」を重ね合わせてできた。

ウ. もともと別々に存在していた「声の文化」と「文字の文化」を中国の漢字を参考に重ね合わせてできた。

エ. もともと完成されていた中国の「文字の文化」に合うように日本の「声の文化」を合わせることで完成した。

問三 ——— 部② 「こうした言語感覚」とありますが、それはどのような言語感覚ですか。その説明として適当な部分を本文から探し、はじめと終わりの五字を書きなさい。

問四 ——— 部③ 「地名となると、さらに難しい」とありますが、それはなぜですか。その理由を解答らんにか合うように七十字以内で答えなさい。ただし、「歴史」「表記」ということばを必ず使うこと。

問五 ——— 部④ 「古代日本における無文字社会」とありますが、この社会で行われていた信仰の説明としてもっとも適当なものを次のアくエの中から選び、記号で答えなさい。

ア. 言葉には力が宿っているので、身分にかかわらず自分に向けて伝えられた言葉には従わなければならないと信じられていた。

イ. 言葉には霊的な力が宿っているので、文字という形にこだわらなくても昔から残る言い伝えや行動を覚えられると信じられていた。

ウ. 音には力が宿っているので、言葉の力は重く受け止められて口から発する音が事となって言ったとおりの状態になると信じられていた。

エ. 音には霊的な力が宿っているので、冠婚葬祭においてふさわしくないとされる忌み言葉のような表現は古代人の迷信だと信じられていた。

問六 —— 部⑤ 「不吉な表現を使わないよう心がけるのがマナーとされている」とありますが、これを開店祝いの祝電に当てはめたとき、避けるべき言葉として最も適切なものを次の祝電のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

この度は、新店舗てんぽの開店おめでとうございます。ア多年の念願がかない、今日という日がイ迎むかえられたこと、心からお喜び申し上げます。お二人のウ炎えんのように熱いエ情熱で、お店を盛り上げてください。今後とも、益ます々の貴店の発展を祈念申し上げます。

問七 空欄

＊

を補うのにもっとも適当な言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア. うるさい イ. ずうずうしい ウ. おぞましい エ. うつとうしい オ. はなばなしい

問八

—— 部⑥ 「少なくとも古代の人びとにとっては、「言霊」はけっして言葉の上だけの修辞ではなかった」とありますが、次のア～エのうち、本文の内容と合うものには○を、合わないものには×を書きなさい。

ア. 古代の人びとは身分の高い者も低い者も関係なく、話し言葉を使用して口から口へと伝え合って記憶に留めていたということ。

イ. 古代の人びとにとって「言葉の力」は偉大であると同時に、実際に目に見えて実現したものが数多く現代に残っているということ。

ウ. 古代日本の神話には「言葉の力」によって荒ぶる神々を鎮めたという話も多くあり、それだけ人びとの生活の中に言葉のもつ霊的なパワーが広くいきわたっていたということ。

エ. 古代日本の神話には「神々の大いなる力」によって天孫降臨を成し遂げた言い伝えがあり、目に見える人間の力よりも目に見えない霊的なパワーを手に入れたいと願って日々生活していたということ。

問九 空欄(1)～(5)に補うのにふさわしい小見出しを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア. 「声の文化」と「文字の文化」

イ. 文字のなかった言霊の幸はぶ国

ウ. 名づけの深い森

エ. 邪神を鎮める言葉のパワー

オ. 言霊信仰のDNA

二 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の空白のマスを埋めて縦、横で三字熟語を作り、完成した横の三字熟語を答えなさい。

可		桃
	力	
式		郷

(1)

主		乗
	力	
公		口

(2)

豆		測
	力	
球		士

(3)

真		作
	力	
味		名

(4)

問二 次の(1)～(6)には「イギ」、(3)～(4)には「キシヨウ」、(5)～(6)には「コウカン」の同音異義語を漢字で答えなさい。

- (1) 大妻さんはその意見に [] を唱えた。
- (2) みなさん、有 [] な夏休みを過ごしてくださいね。
- (3) あの先輩は激しい [] の持ち主だから、怒らせないほうがいいよ。
- (4) たった今、 [] 庁から大雪警報が出たところだ。
- (5) 友達と物々 [] をして楽しんだ。
- (6) 中野さんは昔から [] が持てるさわやかな人だ。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の例文中の [] 部の意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 目をこらして彼を見たが、誰だか分からなかった。

- ア. 緊張して目の疲れを覚えながら
- イ. 色々な方向を見ながら
- ウ. 集中してじっと見つめて
- エ. 懸命に目で追って

(2) 弟にサッカーのやり方を手取り足取り教えてあげた。

ア. 自分も一緒に手足を動かして

イ. 細かすぎずおおよっぱに面倒をみる

ウ. 何から何まで細かく面倒をみる

エ. 手と足の動かし方だけを細かく

(3) 友人は「数学のテストで0点をとった」と、あつけらかんと言った。

ア. 思いやりを持たずに冷たく

イ. あまりの意外さにあきれて

ウ. まわりの反応など気にせず平然と

エ. 事実を受け入れて淡々と

(4) 彼女は、はにかんだ笑顔で彼を見つめた。

ア. 恥ずかしそうな

イ. 安心したような

ウ. 甘えるような

エ. 困ったような

(5) 母に怒られて仏頂面ぼつていめんをしている姉を見るのは、おもしろい。

ア. 仏様のような穏やかな顔つき

イ. 感情を全く出さない無表情な顔つき

ウ. 悲しみをこらえきれない顔つき

エ. 不満で怒ったような顔つき

C 文法・言葉づかいに関する問題

問四 次の——部ア～エの中から、違う働きのものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 「で」

- ア. 海で泳ぐ。
- イ. ペンで書く。
- ウ. 車で向かう。
- エ. おはしで食べる。

(2) 「から」

- ア. 山から下りる。
- イ. 隣村から来た。
- ウ. 木から作る。
- エ. 春から夏になる。

(3) 「に」

- ア. 図書館に行く。
- イ. 母にしかられる。
- ウ. 福岡に住む。
- エ. 友人を自宅に招待する。

(4) 「さえ」

- ア. リンゴさえ食べられればそれで十分です。
- イ. あなたさえいてくれればいい。
- ウ. この問題は私でさえわかる。
- エ. 彼にタスキがつながりさえすれば勝てる。

(5)「も」

ア. 彼も私の友人だ。

イ. こんなにもうれしい。

ウ. 歩くことさえもままならない。

エ. 食べるのに一時間もかかった。

問題は以上です。

